栄光の未来は汗と涙のその先に

大相撲 親方 西岩 忍さん（元関脇 若の里）

久方ぶりの日本人横綱の誕生なるかと、注目が集まった本年7月の大相撲・名古屋場所。ちょうど1年前、その名古屋場所を最後に、惜しまれて引退した力士がいる。元関脇・若の里――現在の西岩親方（田子ノ浦部屋）である。本年5月には、山あり谷ありの力士人生をつづった『若の里自伝　たたき上げ』（大空出版）を上梓。親方・西岩忍さんに、相撲に懸ける思いや、師匠・鳴戸親方（元横綱・隆の里）との思い出などを聞いた。

――中学を卒業し、青森から上京。師匠・鳴戸親方のもと、角界一の厳しさといわれた鳴戸部屋で稽古に明け暮れた。

稽古は毎日、午前5時から昼過ぎまで。1日に50から60番、多い時で100番取ることもあった。関取衆でも5分で息の上がるぶつかり稽古を、全ての稽古を終えて2セット、3セットと続けた。

精根尽き果てる稽古を繰り返した下積み時代。それが後の躍進の基盤となった。

苦しい稽古を終えても、炊事、洗濯、掃除、全てやらないといけない。付け人として関取の身の回りのお世話もありました。

そんな中でも、相撲を辞めるなんて考えたことはなかったですね。相撲が大好きだったし、もっと強くなりたいという思いしかなかった。泣き言を言って、つらいから辞めて帰るというのは違うと思いました。自分が選んだ道ですから。

今の若い力士によく言うんです。社会はもっと厳しい、とね。生きるために、家賃も食費も全部、自分が必死に働いて稼がないといけない。相撲部屋では、腹いっぱいちゃんこが食えて、大好きな相撲に集中できる。これほどいい暮らしはないとね。

何事も感謝を忘れてはいけません。下積み時代は、人間として大事なことを、五体を使って学ぶ時だと思います。

――相撲の世界は師匠と弟子の関係なくして語れない。厳しい師弟関係について、著書で触れられている。

師匠・鳴戸親方との初の出会いは、小学6年の時。2011年に突然の別れが訪れるまで、20年間、仕えた。

同年の11月場所、福岡へ向かう時のこと。西岩親方は待ち合わせの1時間前に空港に到着し、下見をしたという。体調の芳しくない師匠を気遣い、搭乗カウンターまでの最短の行き方を調べた。休憩できる椅子の場所も確認した。師匠が乗る車の運転手とやりとりし、駐車場で待ち、車を誘導。飛行機に乗るところから降りるところまで、全てエスコートした。

自分を相撲の世界に導いてくれ、育ててくれた師匠への感謝は尽きない。

自分の全てを築いてくださった。今の自分があるのは師匠のおかげです。実の父と過ごしたのは15年。師匠とは20年。まさに東京の親父でした。

厳しい方で、師匠の前では常に正座でした。でも本当に弟子思いの方だった。四股名を決めるのに、30以上の案を挙げ、その一つ一つの意味を説明して、最後に「若の里」と決めてくださった。栄養の偏りで体を壊さないようにと、食事にも徹して気を配ってくださいました。

尊敬する師匠・鳴戸親方はもういませんが、土俵に立つたびに「今まで教えることは全て教えた。あとは自分で考えて生きていけ」と言われているようで。

師匠の教えは全部頭に入っています。それを基にして、必死に考え、全力で生きていこうと決めています。それが亡き師匠へのご恩返しだと思います。

――23年半の現役生活、39歳まで力士として土俵に立った。

通算勝利数は914勝で歴代7位。憧れの力士、横綱・貴乃花（現在の一代年寄・貴乃花）の勝ち星を抜いた時は感慨ひとしおだったという。15歳の時、巡業で青森を訪れた若き日の貴乃花との一番が自身を相撲の世界に強くいざなったからだ。

現役時代は9度の手術を経験し、晩年は怪我に悩まされ続けたが、三役（※注）在位が連続19場所という歴代1位の記録は、その活躍と奮闘を雄弁に物語る。

山あり谷ありの力士人生を通して伝えたい思いとは。

ありすぎて困ります（笑い）。

人よりも長く現役を過ごして思うことは、やはり「頑張れば頑張った分だけ返ってくる」ということです。

よく鳴戸親方から言われました。「俺も師匠（初代・若乃花）から言われたんだ。『土俵の中には、地位も名誉も金も全て埋まっている。ただし、それを掘り起こすのは、スコップではできない。血と汗と涙で掘り起こした人だけが、それをつかめるんだ』」と。

あと、もう一つ。生涯に一度だけ、立ち合いで〝変化〟したことがあって。怪我をしていて、まともにぶつかったのでは勝てないと思って、立ったと同時に左にかわったのですが、あっけなく押し出され、負けてしまいました。

その日の晩、食事に行った寿司屋でファンの方に偶然会って言われたんですよ。〝私は、常に真っ向勝負の若の里の立ち合いが好きなんです〟とね。

自分の姿勢を恥じました。そして、そこからの現役生活15年くらいは一度も立ち合いは変えませんでした。悔いを残すような戦い方はダメですね。

自分を信じて、磨いてきた自分の力で栄光の未来を開いていく。血と汗と涙を流した、その向こうには、苦しかった何十倍、何百倍の喜びがあるんです。

夢や目標を目指している若い人には、自分の信念を貫いて、そういう喜びを味わってほしいですね。

にしいわ・しのぶ　1976年、青森県弘前市生まれ。92年、鳴戸部屋に入門。同年の3月場所、古川の四股名で初土俵を踏む。97年の11月場所で新十両となり、「若の里」に改名。新十両優勝を収めた。翌年の5月場所で新入幕を果たし、10勝を挙げて敢闘賞を受賞。2001年の1月場所で関脇に昇進し、15年の9月場所を前に現役引退を発表。年寄・12代「西岩」を襲名した。現在は田子ノ浦部屋の部屋付き親方として、後進の指導に当たる。

「若の里自伝 たたき上げ」（大空出版）

――今場所は惜しくも綱とりとならかったが、来場所の挑戦へ注目が高まる大関・稀勢の里、今場所で技能賞に輝いた小結・高安らが所属する田子ノ浦部屋。部屋付き親方として、後進の育成に尽力する日々だ。

毎朝、自身もまわしを締め、土俵に上がって稽古に臨む。後輩のぶつかり稽古の相手をし、取り組みに細かく助言する。

現役を退いて1年。新米親方として、どんな力士を育てたいか――。その答えは、そのまま若者へのエールになっている。

心の強い力士を育てたいですね。逆境に負けない力士です。場所を通じて、その姿を見ていただくことで、皆さんに何かしらの勇気や励ましを送れたらと思います。

相撲は「心技体」と言います。「心」が一番最初にくるんです。

どうすれば心を鍛えられるのか。かつて自身の稽古にメンタルトレーニングを取り入れた時に学んだことなのですが、「プラス思考」を続けることが大事だと思います。

マイナス思考だと、怪我をしたら落ち込むしかない。そこから不安が生まれます。逆にプラス思考だと、例えば膝を怪我しても、今は上半身を鍛えるために使おうとなるし、自身のモチベーションを高めていけます。

これは、人生も一緒だと思うんです。壁にぶつかった時、失敗した時、マイナスの状況になっても、プラス思考でいけば、それを全て自身の成長のために活用していける。逆境を前に進む力にしていけます。

新米親方としての新たな人生、自分も、強い心、プラス思考で切り開いていきたいと決意しています。

©PIXTA

感想はこちらへ　メール wakamono@seikyo-np.jp　ファクス 03-3353-5513

※注＝ここでは関脇、小結のみを指す

【編集】鯉渕和博　【写真】古橋正勝　【レイアウト】小林隆明